平成三十年度 富山県公文書館明治百五十年記念企画展

明治の富山

～礎を築いた人びと～

「海内果像」
（富山市立老田小学校蔵）

「米澤紋三郎像」
（富山県公文書館蔵）

「国重正文像」
（富山県公文書館蔵）

「藤井能三像」
（高岡市立伏木図書館蔵）

「富山県設置の達」（富山県公文書館蔵）

平成30年
10月4日（木）
～11月3日（土）

開館時間　午前９時～午後５時

入場無料

富山県

目次

開催にあたって……1
はじめに……2
一　越中の明治維新……2
　幕末の動乱と越中の人びと
　北越戦争と森田三郎
　ばんどり騒動と社会の変化
　越中の文明開化
二　越中の自由民権運動……4
　海内果と相益社
　稲垣示と北立自由党
　島田孝之と越中改進党
三　富山県誕生とその背景……7
　県域の変遷
　分県運動
　富山県設置の背景
　富山県の基盤づくり
　治水と県財政
四　富山県の産業発展……11
　薬業の近代化
　港湾と鉄道の整備
　実業学校の創設と人材育成
五　大正時代へ―さらなる産業発展に向けて―……14
　日露戦争と富山県
　治水から発電へ
　工業県への動き
おわりに……16
◇主要参考文献……16
◇企画展史資料一覧……17

開催にあたって

二〇一八年（平成三十）は、明治改元の一八六八年から一五〇年目にあたります。一八六八年は、一連の大改革「明治維新」が始まった節目の年です。一八五三年（嘉永六）の黒船来航以降、幕藩体制が崩壊へと加速し、大政奉還、王政復古、戊辰戦争と続く中、明治新政府は天皇を中心とした中央集権的な近代国家づくりを進めていきます。こうした状況の中、富国強兵・殖産興業のスローガンのもと、日本各地で鉄道・港湾など交通網の整備、義務教育の導入、産業の育成などが進められていきました。一方で、変革が続く中、人びとの間に新時代にふさわしい国家を目指して、自由民権運動などの動きが広がっていきました。富山の人びとも、中央の政治動向をにらみながら、新しい郷土のあり方を探り、様々な努力を重ねていきました。自由民権運動が高揚する中で、当時の人々の願いや思い、行動が結実して富山県が設置されました。

幕末から明治時代にかけての激動の時代を、人びとはどのように生き抜き、現在の富山県の土台を作っていったのでしょうか。主に当館所蔵の史資料を中心に、先人たちの歩みを紹介します。明治一五〇年を記念する本年に、当時の人びとの活躍と苦悩の跡を振り返り、今後の富山県を考えるきっかけとなれば幸いです。

今回の企画展を開催するにあたって、多くの方々や機関からご協力を賜りました。ここにご芳名を記して感謝の意を表します。

国立公文書館　国立国会図書館　富山県議会図書室　富山県立図書館　富山県映像センター
富山県立山カルデラ砂防博物館　砺波市教育委員会　高岡市立伏木図書館　富山市立老田小学校
稲垣甚一郎（射水市）　稲田伸子（富山市）　内田忠保（立山町）　海内宏憲（富山市）
島田政啓（富山市）　冨田利彦（南砺市）　森田健一郎（富山市）　伊藤成志（埼玉県）
河尻裕巳（岐阜県）　佐伯敬之（千葉県）　古畑弘子（東京都）

（順不同敬称略）

平成三十年十月

富山県公文書館

はじめに

明治とはどのような時代だったのか。

慶応三年（一八六七）十月十四日に徳川慶喜が大政奉還を行い、王政復古と戊辰戦争を経て実権は将軍から天皇を頂点とする新政府に移り、慶応四年九月八日、明治と改元される。明治時代は欧米列強をモデルとして近代化が進められ、富国強兵・殖産興業・文明開化の政策が進められた。そして大日本帝国憲法をはじめとする法による国家の運営、近代的な地方制度としての府県制、地租改正などの税制の改革などが行なわれた。また、近代的な教育制度を導入し、郵便制度、鉄道などの交通や通信網も整備された。現在の社会を形作るものの基礎は、この時代に築かれたのである。

今回の展示では、このような日本全体の動向をふまえ、幕末から明治末の富山の歴史を、富山県の設置をハイライトとして五部構成で紹介する。また、民権運動や分県運動、富山県の土台となるインフラ整備などで活躍した人びとの姿を取り上げたい。

一　越中の明治維新

幕末の動乱と越中の人びと

幕末の越中では、上層農民の中に江戸や京都の情勢に通じている者が少なくない。彼らは藩からの諸達や書状、江戸や京都の知己などを通して情報を入手していた。「大目付より今般御上洛につき浪人縮り方など触書」を所蔵していた佐伯家は、加賀藩から当主が新川郡犬島村（現、富山市）の肝煎に任じられた家である。この高札には、浪人らが水戸藩浪人や新徴組を名乗って金を要求したり、勅命と称して村人を仲間に入れる等の風聞が記述されている。幕府の史料「文久三年御書付留巻十三」十二月の触書にほぼ同趣旨の記述がある。幕府は、将軍家茂の上洛を前に、浪人の取締りや旅行の事前申請を義務づけて街道筋の治安を強化しており、当時の日本を覆う不穏な空気や情勢を越中の人びとも感じていたことが分かる。

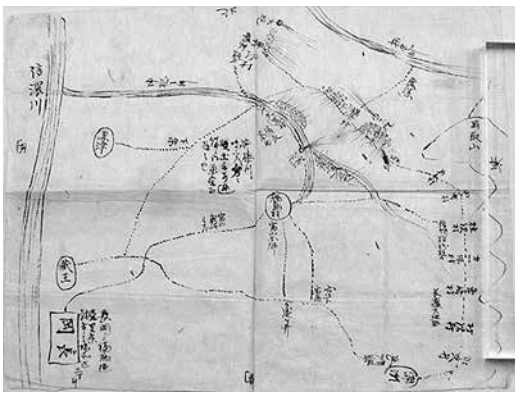
大目付より今般御上洛につき浪人縮り方など触書
（富山県公文書館寄託　佐伯家文書）

北越戦争と森田三郎

北越戦争は、戊辰戦争の一つで、慶応四年（一八六八）閏四月から八月に越後中・北部で行われた新政府軍と奥羽越列藩同盟軍との戦争である。王政復古後の新政権をめぐる新政府軍と旧幕府軍との争いに対して、加賀藩・富山藩は、新政府側につき、旧幕府軍と戦うことになった。慶応四年四月には旧幕府側の長岡藩への出兵命令が下り、同年閏四月、富山藩も四四〇名を出兵させた。富山藩小隊司令士として参戦した森田三郎は、天保十二年（一八四一）、船橋今町に富山藩士森田直右衛門忠則の次男として生まれ、剛

コラム―若き安田善次郎と幕末・明治維新―

幕末の不穏な空気が漂う中、富山から江戸に出て一旗あげようとしていた若者がいた。のちの安田財閥の創始者、安田善次郎である。安田は天保九年（一八三八）、富山城下の貧しい武士の家に生まれ、二〇歳のときに商人を志し奉公人として江戸に出た。玩具屋に始まり、ついで鰹節屋兼両替商に勤めた。当時の江戸では、貿易や戊辰戦争の影響で流通が活発で大量の貨幣が動いていた。その機を逃さず二五歳で独立し、乾物と両替を商う安田商店を開業した。その後も世情不安のなかで幕府や明治新政府とのつながりを深め巨利を得た。明治七年（一八七四）以後は諸官庁の公金取扱い御用を引受け金融業者として急成長し、明治十三年、安田財閥のベースとなる安田銀行を発足させたのである。



富山藩本陣福島北側戦闘図
（富山県公文書館寄託　森田家文書）

毅で剣術を最も得意としていた。北越戦争時、三郎は慶応四年二月に小隊司令士として出兵を命じられ、閏四月二十一日には政府軍の終結する高田に到着、高田城下の様子を家族に報告している。五月に戦闘が始まり、同月半ばに新政府軍が長岡城を落とした。一連の戦闘に対して北陸道鎮撫総督高倉永祜（ながさち）、副総督四条隆平から富山隊に対し酒肴が送られている。しかし、米沢藩の援軍を得た長岡藩が盛り返し、長岡城奪還に向けて戦闘は激化した。三郎率いる富山藩五番小隊は福島村の防衛を担当した。六月二十二日未明、敵の奇襲攻撃を受け五番小隊は敗走、三郎はこの戦闘で戦死する。二八歳の若さだった。

この戦争で加賀藩・富山藩は兵を派遣するだけでなく、新政府軍の兵站基地としての役割を課せられ、多数の百姓が物資の運搬に従事させられた。北越戦争は、越中の人々にとって、時代の激しい変化を強く感じさせる出来事だった。

ばんどり騒動と社会の変化

明治維新を迎えた各藩では、急激な変革の中で激しい農民の騒擾に直面する。北越戦争の翌明治二年（一八六九）、越中は大凶作に見舞われた。砺波郡が凶作対策を進める一方、新川郡では十村層が通常通りの年貢を取り立てていた。新川郡の農民たちは十月、塚越村忠次郎をリーダーとし、貢租徴収の公正、十村・同手代・惣代肝煎の公選、貢租減免、物価引下げなどを要求して蜂起した。各地での嘆願、強訴が繰り返され、二十三日以後は打ちこわし、焼打ちが起こり、参加人員は最高二万人に達した。しかし十一月三日に、加賀藩の鉄砲隊の前に一〇数名の死傷者を出して鎮圧された。この騒動は、この時期の代表的な世直し一揆の一つである。参加農民の多くが「ばんどり」（蓑の一種）を着用したことから、「ばんどり騒動」の名がある。

暴動頭塚越村忠次郎等
金沢於公事場取糺口書綴
（富山県立図書館蔵）

首謀者として逮捕された忠次郎は金沢に送られ、翌明治三年七月から本格的な詮議を受ける。注目すべき点は、忠次郎が騒動前の一〇年間を東北や函館で過ごしていたことである。特に函館では異人館の建設現場で働いていたことがあり、異文化に触れる機会を持っていた。このことが故郷の後進性を痛感させ、直接行動に踏み切らせたのかもしれない。結局、この騒動の中心人物の中では、忠次郎のみが死刑となった。

社会制度が大きく変革されていく中で、ばんどり騒動後も越中では民衆の激しい反発が見られた。特に、同十年の戸出騒動（砺波騒動）は、地租改正に反対する農民による暴動であり、一〇〇〇人にのぼる小作農が逮捕されている。しかし、首謀者たちは、意外なほど軽い処分で済まされた。この時期は全国的に地租改正反対一揆が盛り上がっており、西南戦争の最中でもあったことが、軽い処分の理由であったと考えられる。

西南戦争には、越中を管下に置く名古屋鎮台金沢歩兵第七連隊が出撃しており、富山藩出身者で出陣した者もいる。浅野清棟は、富山藩士浅野十兵衛の二男で、明治六年六月に陸軍二等伍長となり、西南戦争には東京鎮台の軍曹として出撃している（浅野家文書「西南役出征覚」）。西南戦争は日本最後の内戦となり、徴兵令により平民の子弟らも戦地に赴くこととなって、士族（武士）の軍事専門職としての存在意義を消滅させた。明治が始まって一〇年が経過し、西南戦争や地租改正反対一揆の終息によって実力行使による反体制運動は見られなくなり、民権運動の言論闘争の時代に入っていく。その意味でも明治十年は、明治維新の一つの区切りといえる。

越中の文明開化

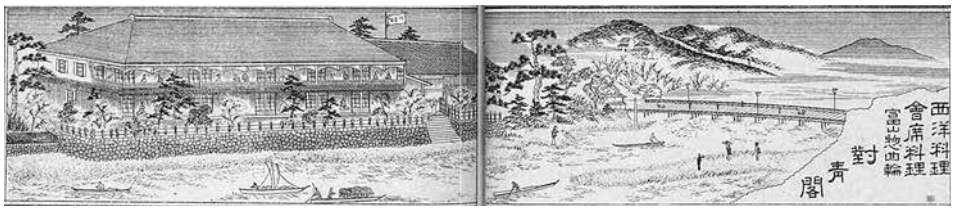
文明開化を象徴する断髪は、県下では明治三年（一八七〇）ごろにその例がある。一般には小学生から普及し始めた。女性の束髪は同十八年ころから花柳界を中心に流行し始めた。一方、地方での洋服はなかなか普及しなかった。同十年ころからは男子教員で洋服を着るものが見られるようになった。同二十年に県は小学生男子の制服着用を奨励し、これが洋服普及の一因となった。女子は和服が主であったが、同十五年に県が女子教員の袴着用を指示したため、女学生を中心に束髪の流行とともに袴の着用がさかんになった。

住居はわら葺屋根や石置き屋根が多かったが、明治五年の学制頒布によって、小学校が各地に建てられ、洋風建築も見られるようになった。灯火は同五年に福光で石油ランプを使った例があり、同八年には福光町本町通りにガス灯（石油ランプ灯）が一本建てられた。家の採光にガラスを利用する建物も見られるようになった。同十六年神通川の木橋架設にあわせ、橋東詰に開業した西洋料理屋「対青閣」はガラス戸と洋館二階建てで評判になった。

郵便制度は、明治四年に金沢県庁が郵便主付を設置したのが本格化の第一歩で、同五年三月以降、越中にも郵便役所が順次設けられた。同六年から郵便事業は政府管掌となり、飛脚を廃して切手・葉書を売り出すなど全国を統一する運用が開始された。

人びとの生活に大きな影響を与えた新制度が近代的学校制度と太陽暦の使用である。明治政府は近代的教育の創始を重視し、明治五年に「学制」を頒布した。県下でも学区が設定され、同六年には二七一校の公立学校と一校の私立学校が発足した。「国民皆学」を謳っていたが、重要な労働力である児童を終日学校に通わせる家は少なく、同六年の就学率は二三・三％にすぎなかった。太陽暦の採用についても、明治五年十一月九日、太政官は突如詔勅を下して、同五年十二月三日をもって同六年一月一日とするという暦制改革を行った。準備期間がほとんどなく、一遍の布告だけで長年の生活風習を改めることは困難で、民衆の間に混乱を引き起こした。

対青閣（『中越商工便覧』（国会図書館デジタルコレクション）より）



コラム―林忠正―東西文化の架け橋―

文明開化の時代に東西文化の架け橋となったのが林忠正である。林は嘉永六年（一八五三）、越中国高岡の蘭方外科医長崎正国の次男として生まれた。明治三年（一八七〇）、富山藩大参事に就任した従兄の富山藩士・林太仲の養嗣子となり、「林忠正」を名乗った。翌年、富山藩貢進生として大学南校（現、東京大学）に入学し、フランス語を学んだ。明治十一年フランスに渡り、同年のパリ万国博覧会では通訳を務めた。折しもヨーロッパでは日本美術への関心が非常に高まっていた。林は美術商として日本の美術品を販売する以外にも日本文化や美術の紹介などにも努めた。一方で印象派の作品も日本に紹介するなど、まさに東西文化の架け橋だった。伊藤博文などの政府要人とも親交が深く、明治三十三年のパリ万国博覧会では民間人ながらも日本事務局の事務官長を務めた。

二、越中の自由民権運動

自由民権運動は、明治時代を象徴する政治運動である。越中でも西洋の思想や文化・制度に触れ、権力に対する自治意識を育み、地方から国家のあり方を変革する運動をリードした青年たちがいた。ここでは、ジャーナリストとして活躍し、開明思想の普及に尽力した海内果、越中における自由党系の中心人物の稲垣示、改進党系の中心人物の島田孝之をとりあげる。

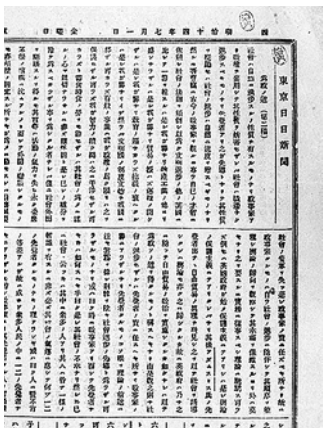
海内果と相益社

海内果
（富山市立老田小学校蔵）
海内果は老田小学校の前身、菁莪小学校の初代校長でもある。

海内果は、嘉永三年（一八五〇）、射水郡中老田村（現、富山市）の村肝煎の家に生まれた。農業のかたわら富山の儒学者岡田呉陽のもとで漢学を学んだ。また『明六雑誌』や『西国立志編』など当時の啓蒙的な書籍を読み、開明的な知識を身につけていった。明治九年（一八七六）には石川県第十四大区（射水郡小杉地区）副区長となる。海内が書写した「旧新川県引渡演述書写」は、新川県が石川県に合併するにあたって、旧新川県の概略などをまとめたものである。

この頃、海内は公務のかたわら「東京日日新聞」（明治五年創刊）に盛んに投稿した。これが同紙主筆の福地源一郎の注目するところとなり、福地に請われ、海内は副区長を辞職して同九年十二月に上京し、同紙の記者となり社説を担当した。内容は多岐にわたり、中でも地租改正や伏木開港に関する論説は大きな影響を与えた。

海内は、故郷富山への啓蒙活動にも力を入れた。翌十年九月、当時、東京で司法省権少丞の任に就いていた増田賛（小杉町出身）と郷里の開化を渇望する有志のために組織を設けようと考え、小杉町に相益社を設立した。相益社は、明治五年に同じく小杉に設立された書籍販売・開化思想の発信センターである開智社に置かれ、ゆかりの人々が参加した。明治十一年、相益社は県内で初めての開化雑誌『相益社談』を発行した。これは『明六雑誌』を模範とした雑誌で、海内や増田など多くの同人が寄稿した。この間に相益社は、越中の民権運動の勢力の一つに成長していった。



東京日日新聞
（富山県公文書館蔵　海内家文書）

コラム ― ジャーナリスト横山源之助 ―

明治時代の県出身のジャーナリストとして有名なのが、明治三十二年（一八九九）に『日本之下層社会』を出版した横山源之助である。横山は明治四年、魚津町に生まれ左官職人の養子となり、商家に奉公しながら独学して富山県立富山中学校一期生として入学した。しかし二年生の時に中退、代言人（弁護士）を目指して上京し、英吉利法律学校（現、中央大学）に学んだが弁護士試験に合格できず、各地を放浪する。その後、明治二十七年に、毎日新聞社に記者として入社し、下層社会のルポルタージュを中心に活動した。

海内は、高岡の大橋十右衛門らと慶応義塾をモデルにした塾の創設も計画していた。しかし、明治十四年九月二日、帰郷の際に腸チフスにかかり亡くなってしまう。海内の死後、大橋がその遺志を受け継ぎ、同年十一月に個人経営の塾として越中義塾を高岡片原横町に創設した。海内亡き後、相益社の社友や大橋、越中義塾で学んだ塾生の多くが越中改進党に参加した。

稲垣示と北立自由党

稲垣示
（『富山県政史』四より）

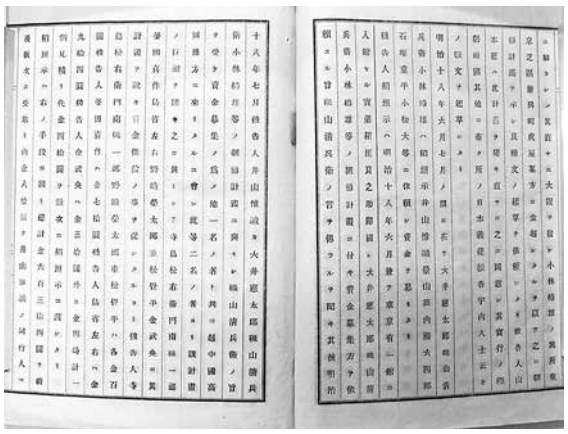
地租改正や徴兵令など改革が実施され、西南戦争には越中の農民たちも動員されるなど、越中では大きな社会変動が生じていたが、それが自分たちの政治的関心に結びつくことはあまりなかった。そのような中、越中で本格的な民権運動の動きを起こしたのが稲垣示だった。

稲垣は嘉永二年（一八四九）、射水郡棚田村（現、射水市）の豪農の家に生まれた。新川県講習所などで学んだ後、小杉の相益社に入った。しかし、明治十三年（一八八〇）に立志社の板垣退助に呼応して高岡に政治結社北立

社を創立し、同年の国会期成同盟結成大会に越中からただ一人参加した。同年十一月国会開設哀願表を提出するため上京し、六度も提出を試みた。

明治十五年、稲垣は中央での自由党結成に応じ、高岡坂下町に県内最初の政党として北立自由党を結成した。この年は松方正義による厳しい緊縮財政政策により、デフレ不況が発生した。米価や繭価の下落と、政府による民権運動弾圧強化によって豪農を中心とする民権運動は曲がり角を迎えた。このような状況下、稲垣は九名の発起人に名を連ね、明治十六年三月十日、高岡の瑞龍寺に北陸七州（佐渡・越後・越中・能登・加賀・越前・若狭）から三百人近い民権家を集めて北陸七州有志大懇親会を開催した。集会では北陸自由共同会の結成など、自由党系の再編がはかられた。またこの頃、改進党系を中心に分県運動もあったが、稲垣は民権運動には不利として反対した。全国的に民権運動が激化する中、明治十七年に自由党は解党し、北立自由党も同年に解党した。

そのような中、明治十八年の大阪事件には、稲垣ら自由党系の富山県人が多く関わっていた。大阪事件は、朝鮮における親日派の衰退を見た旧自由党左派の大井憲太郎・磯山清兵衛らが独立党政権を樹立する計画を立てたが、大阪港渡航が発覚し、一同が逮捕された事件である。稲垣はその計画の指導者の一人であり、資金調達を行なっていた。この事件に関係した県人一三名が起訴され、稲垣ら六名が有罪となった。この事件は越中政界の勢力関係を大きく変え、県会議員は改進党系が多数を占めた。稲垣は三年間入獄し、明治二十二年二月の帝国憲法発布の大赦で出獄した。その後、稲垣は大同団結運動に加わるが、島田孝之などの改進党系と激しく対立した。次第に大同派が優勢になっていく中、明治二十三年第一回衆議院議員総選挙が行われた。稲垣は明治二十四年に衆議院議員に当選し、自由党が立憲政友会になってからも富山県支部長として奮闘した。



大阪事件公訴状
（富山県公文書館寄託　稲垣示関係文書）

島田孝之と越中改進党

島田孝之
（富山県公文書館蔵）

島田孝之は、越中の改進党系の中心人物である。孝之は砺波郡般若野村島新（現、高岡市）に生まれ、金沢の明治義塾などに学んだ。明治十年（一八七七）青森県に出向し、同十二年には青森県野辺地警察署長となるが、同十四年、国会の開設が約束されると、富山に戻り、民権運動に身を投じた。同年、島田は、同志を集めて政治結社北辰社を創設した。翌年五月には立憲改進党結成の動きに呼応して島田が主導し、越中自治党・相益社・越中義塾・北辰社、その他越中五郡の有志五百余名が高岡超願寺に会し、越中改進党を結成した。越中自治党は横山隆通・入江直友・米澤紋三郎らが呉東を中心に結成した政党である。稲垣示の北立自由党に批判的であり、越中自治を党名としたねらいは分県にあったといえる。越中改進党は漸進主義、地方中心主義をかかげた。ここに、越中改進党と北立自由党という二大政党がそろった。両党はその主義主張は異なるが、士族は少なく豪農が大部分だった。

越中改進党は党首をおかず、島田孝之・大橋十右衛門・米澤紋三郎・入江直友の四人の幹事による合議で運営された。越中改進党は、中央の立憲改進党の地方組織ではなかったが、立憲改進党との関係のあり方をめぐって結成当初より対立が生じていた。島田は、明治十四年九月に上京し、大隈重信・尾崎行雄などと接触をはかり、富山の同志たちに立憲改進党の傘下に入るこ

とを求めた。明治十五年夏には越中の越中改進党系の町村有志代表五〇余名が富山に集まって分県の請願を決議する大会の主要メンバーとして参加する。しかし、越中改進党内では、党の路線をめぐって旧越中自治党メンバーと島田のグループの対立が顕在化し、同年十二月、島田らが離党して党は分裂した。島田は立憲改進党系の同志を糾合し、立憲改進党への合流を実現した。また、明治十八年には『北辰雑誌』を創刊し、民権思想の啓蒙にも努めた。

富山県成立後は富山県会議員に選出され、明治十九年には県会議長となった。同二十二年二月には県会議長として大日本帝国憲法発布式典に出席し、その時の経緯や抱いた思いを詳細に記録している。明治二十三年の第一回衆議院議員選挙に当選し、以来四選を果たしている。また実業家としても活躍し、富山県初の中越鉄道の敷設や富山県農工銀行の設立にも尽力した。

北辰雑誌
（富山県立図書館蔵）

三、富山県誕生とその背景

明治十六年（一八八三）五月九日、現在の富山県が誕生した。石川県から富山県を分離させる分県運動は、民権運動の真っ只中に起こった。分県を動機として地方自治を実現することが、越中の民権運動が目指した方向の一つだったのである。

県域の変遷

明治四年の廃藩置県によって、旧富山藩は富山県となったが、その後の三回にわたる県域の変更を経て、明治十六年五月に富山県が太政官令第十五号によって設置される。県域の変遷は次のとおりである。

①明治四年七月、富山県・金沢県・大聖寺県を設置（全国で三府三〇二県）。
②明治四年十一月、富山・金沢・大聖寺の三県を廃し、新川・金沢・七尾の三県を設置。越中国射水郡は七尾県の管轄（全国で三府七二県）。
③明治五年九月、七尾県を廃し、射水郡は新川県に編入。
④明治九年四月、新川県を廃し、石川県に編入。（全国で三府三五県）。

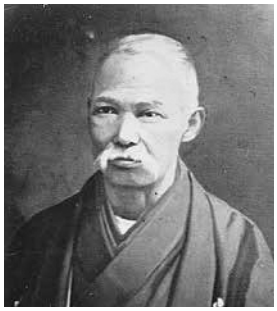
以上の変遷を経て明治十六年（一八八三）五月、富山県が設置された。

県域の変遷

分県運動

廃藩置県の動きの中で、最も府県統合が進んだのが明治九年（一八七六）に実施された第二次府県統合である。明治政府は、府県統合を進めることによって各府県への国庫支出金を削減しようとした。しかし、この統合で発足した県の中には、地域間対立や地理的要件の不一致などの問題を含むものが多かった。越中が編入された「大石川県」もまさにそうだった。明治十三年、政府は地方税規則を改正し、翌十四年からの土木費・教育費の国庫補助廃止を決定した。そのため、土木費の支出による受益区域は限定されることになった。そのため、各府県会議員の対立を生んだ。

明治十四年十二月十九日に石埼謙が分県の建白書を元老院に提出した。石埼は天保十三年（一八四二）、砺波郡小島村（現、砺波市）の村役人の家に生まれた。明治十四年当時、司法省の属官をしていた石埼


石埼 謙
（砺波正倉HPより）

は、全国各地で行われていた分県運動の流れにのり、富山県を設立するための「分県之建白書」を元老院に提出した。

越中での分県運動は越中自治党、改進党系の人々によって大きく動き出す。入江直友、米澤紋三郎、横山隆通、大橋十右衛門、田村惟昌、島田孝之、そして藤井能三らである。明治十五年夏には越中の町村有志代表五〇余名が富山に集まって分県の請願をなし、投票によって米澤を委員長、入江を副委員長に選出した。二人は直ちに上京し、内務卿山田顕義に米澤が作成した分県の建白書を提出し、三条実美・岩倉具視に謁見した。全国的に民権運動が盛り上がる中、明治十五年段階で内務省は一八府県の分合案を取り上げて、十二月一日の参事院総会には富山・松本・佐賀・宮崎の四県の分立が妥当であることが報告されていた。結果、明治十六年五月九日、太政官令第十五号により、富山県の分県が成立した。

この運動の中心だった米澤紋三郎は、新川郡入膳村（現、入善町）の豪農の家に生まれた。一四歳で富山藩儒岡田呉陽の塾に入門し、一七歳で塾頭となった。おなじく分県運動で活躍した入江直友は、富山藩士入江帆三の長男だったが、岡田呉陽の下で学び、米澤とは机を並べ学びあった間柄だった。明治十五年二月、米澤と入江らは呉東の有志と越中自治党を結成した。同年五月には越中全体の自由党系以外の有志と越中改進党を結成し、二人が幹事となった。その後、立憲改進党との連携を重視する島田孝之らとは袂を分かつが、分県運動の高まりの中で、米澤は、入江とともに分県の建白を行った。米澤は富山県成立後は県会議員に当選、議長を二度務めた。明治二十九年、入善銀行を創立して頭取となり、地元経済の発展にも貢献した。明治三十六年、衆議院議員選挙で初当選し、立憲政友会に所属した。一方、置県後の入江は富山市助役、富山商業会議所議員を務め、市政や実業界に貢献した。

米澤紋三郎
（富山県公文書館蔵）

富山県設置の背景

富山県が石川県から分離することによって、越中に住む人びとはどのような利益を得たのか。また、富山県の分県を認めた中央政府はどのような状況だったのか。富山県の分県が成立した要因を地元有志の熱心な分県運動に注目して捉えるのみならず、複数の視点からフォーカスしていくことが歴史の多面的理解にとって重要だろう。富山県設置の背景についても、これまで様々な説が唱えられている。

越中側の主張する分県の理由としては、主なものとして以下の三点があげられている。第一に、石川県当局の土木費計上の中心は官公署・学校の再構築と道路整備だったのに対して、越中側は河川工事の必要性を強く主張していた。第二に、伏木港の整備、第三には、高岡に米穀取引所を設置することである。明治初年以来、高岡の商人は米穀取引所の設置を何回も申請したが、県当局によって許可されなかった。この三点のうち、第一の河川工事は、越中全体に共通する要求事項であるが、第二の伏木港整備と、第三の高岡米穀取引所設置は、呉東には直接に関係のないことであり、呉西の問題であった。この点が、呉西地方が分県運動に参加した理由と考えられている。

一方、分県を認める側の中央政府はどういう状況に置かれていたのか。明治十五年（一八八二）は各地で分県運動が盛んだった。当時明治十四年の政変で薩長閥を中心とする政府が成立し、国会開設の詔が発布された。その際、太政官に参事院が設けられ、伊藤博文が議長となった。また大蔵卿には松方正義、内務卿には山田顕義が就任した。参事院は地方制度に強い権限を持ち、

大隈重信
（『近代日本人の肖像』HPより）

山田顕義
（『近代日本人の肖像』HPより）

特に山田は徹底した民権運動弾圧を行った人物であった。

政府は明治十五年に、「石川県県治改革」と題する上申書を明治天皇に提出している。これは石川県の大改革が必要であると訴えるものである。明治十一年に大久保利通は石川県の不平士族により暗殺され、政府にとって石川県は「難治の県」とされていた。

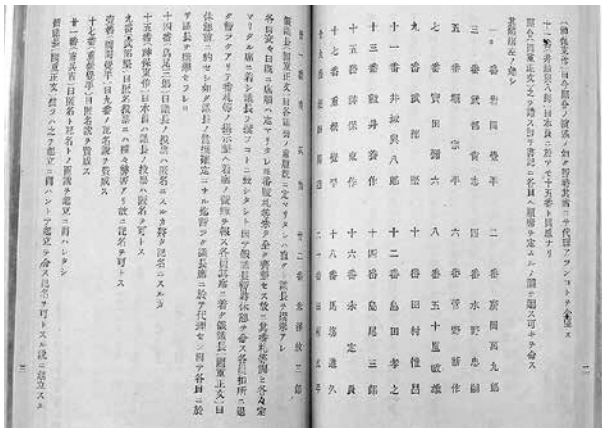
次に、富山県と同日に成立した佐賀県と宮崎県の九州の二県について注目したものもある。山田が特に注意していたのは佐賀の動向である。佐賀は、当時長崎県の一部だった。明治十四年の政変で佐賀出身の大隈重信は政府から追放され、明治七年には佐賀の乱も起こっている。政府にとっては佐賀も要注意の地域であり、これ以上佐賀出身の政府要人を離脱させないことが重要だった。中でも大木喬任は分県について熱心に訴えていた。

宮崎は当時、鹿児島県の一部とされていたため西南戦争では戦場となり大きな被害を蒙った。西南戦争後、県庁のある鹿児島から遠いこと、予算配分が旧薩摩より少ないことなどの理由により、宮崎県の分県を望む声が高まっていた。山田はこの動きに対し、分県については県会を通して願い出るように通達した。ところが、鹿児島県会は三党が対立したこともあり、分県建議案がすぐには通らなかった。山田にとって重要なのは宮崎よりも佐賀であり、県会次第という判断をしたと考えられる。

このように、時期的に越中の地元有志による熱烈な分県運動と、中央政府の石川県、佐賀や宮崎など他地域の動きにも配慮した政治的判断などが、分県が進む方向にうまくかみ合ったのではないかと考えられる。

富山県の基盤づくり

明治十六年（一八八三）五月九日付で、長州（現、山口県）出身で京都府大書記官であった国重正文が富山県令（明治十九年七月より県知事）として赴任し、県庁を富山城址に設置した。さらに、県会議員の改選手続きが取られ、選挙の結果、国重県令は八月一日に当選議員を告示した。米澤紋三郎、田村惟昌、島田孝之ら二二名が県会議員となった。同年八月十七日、置県後最初の県会が開催された。国重は五年六か月にわたって、県令・知事として政争の激しい県会への対応に務めながら、勧業、教育、治水、防疫など様々な分野の発展に尽力し、県民から「名県令」と讃えられた。



『明治十六年八月富山県臨時会議事録』
（富山県議会図書室蔵）

萩藩のエリートを育てる藩校明倫館で学び、順調にキャリアを積んだ国重は、地域を支える人材を育てる教育の重要性をよく認識していたと考えられる。置県当時、富山県には中等教育の施設がなく、有力な私塾もないため、向学心ある若者は東京や京都、金沢へ行くほかなかった。国重は明治十七年、富山啓迪（けいてき）小学校高等科卒業式に出席した。その際、卒業生が本県に中学校がないことを嘆き、その設立を訴えた。国重はこれに応え、中学校新設にむけて努力すると述べたという。明治十七年の県会に富山中学創設予算が提案されたが、当時は分県したばかりで様々な分野に経費が必要な上、松方デフレの不況の最中でもあり、中学設立に反対する意見も多かった。激しい議論の末に中学創設案は可決された。県予算約三〇〇〇円に対し、七〇〇〇円を超える民間寄付金が集まった。国重は政府に中学校設置の伺いを立て許可されている。分県の功労者の一人入江直友が総曲輪に校地を提供し、明治十八年一月二十五日、富山県中学校が開校した。

また、水害が多かった萩出身の国重は、長州藩士の頃に代官として水防対策にあたった経験がある。さらに国重が京都府権参事に任じられた明治七年、京都府は内務省から技師デ・レイケを招聘し、治水調査を依頼している。そ

国重正文
（富山県公文書館蔵）

の調査にもとづき、明治十一年以降、京都府は砂防工事や治山工事を進めている。国重は京都府時代の経験と、同郷の内務卿山田顕義との人脈を生かし、富山県令就任早々に測量機器の買い上げを命じた。オランダ人技師ムルデルの報告書をもとに庄川の測量と砂防工事を内務省が開始した際も、庄川地域の諸山を守るための布達を出している。また、治水事業の熟練者を京都府から呼び寄せた。水害に苦しんでいた富山県にとって、同じく水害に悩まされた萩を出身地とし、治水対策の経験を持つ国重が初代県令として赴任したことは大きな幸いだった。その後、富山県は治水ファーストの県政をとり、現在は洪水に悩まされることも少なくなった。また、教育の重要性を知る国重が、苦しい財政の中、教育に予算を割いたことは、後に教育県と呼ばれる富山県の礎となったと考えられる。

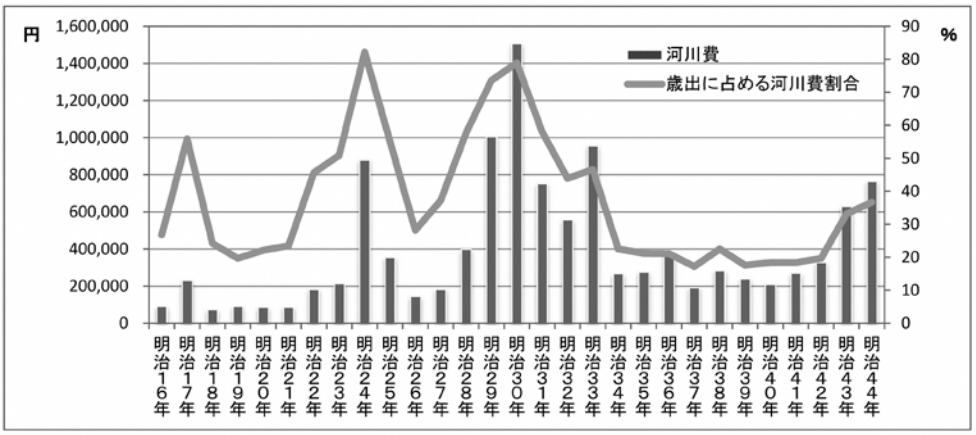
治水と県財政

富山県初代県令、国重正文が赴任したころ、庄川の上流の山地に砂防工事が内務省直轄で起工された（明治十八年打ち切り）。内務省は、毎年河川改修費を支出している庄川と富山県内河川の実況調査をするため、オランダ人技師ムルデルを派遣した。ムルデルは、県内各河川を巡回し、各河川の状況を克明に調査・記録した。その上で、堤防の修築や用水の合口化、上流山林の乱伐と山腹の急斜面の耕作の禁止など多岐にわたって指示や要望をあげた。

明治十八年（一八八五）には神通川、庄川等の洪水があり、国庫補助金一〇万円を受けた。さらに、明治二十二年、同二十三年、神通川を主として出水があり、富山市内は大浸水した。これらの洪水に対して、県は治水対策のための国庫補助を上申している。明治二十四年（一八九一）には常願寺川・庄川・神通川・黒部川などが氾濫し、溺死者・流失田畑などの被害が甚大なものとなり、皇室からの下賜金、国庫・地方税からの支出によって、復旧がはかられた。

県は特に被害の大きかった常願寺川改修の必要性を痛感し、抜本的な改修計画を指導する専門家の派遣を政府に要請した。政府は、内務省のブレーンであった技師ヨハネス・デ・レイケを派遣した。デ・レイケは、富山に到着すると直ちにほぼ一か月をかけて県内の各河川を巡り、七月の水害状況を調査した。デ・レイケは、この調査で立山カルデラから流れ出る土砂を抑制する工事の必要性を感じたが、経済的にも技術的にも不可能であると判断し、常西合口用水の新設、堤防の新設・補強・復旧、捷水路開削工事、川幅の拡張など下流の河川改修計画を立案した。改修工事は、明治二十四年十二月から、デ・レイケの指導のもと、内務省から派遣された技師高田雪太郎が指揮をとって進められた。しかし、明治二十五年には再び、県内各河川から出水し、県は富山市参事会から提出された神通川の治水についての請願書を国に提出した。同二十八年、再び神通川を中心に大洪水が発生し、富山市は毎年のように浸水した。これらが原因となって、のちの神通

明治時代の河川費と県歳出額に占める割合（『富山県史』近代統計図表より作成）



川の馳越工事につながる。

同二十九年（一八九六）には、集中豪雨により庄川が氾濫、神通川、黒部川ともに大洪水となり、土木費の歳出総額は一〇五万円にも上った。この年より、県債発行が許可され、国費補助に次第に肩代わりするようになった。明治三十年代に入り毎年のように洪水が発生し、明治三十二年には、県が前年の水害の状況について国に報告している。明治三十四年から神通川馳越工事が施工され、同三十六年に竣工し、富山市の浸水は減少していった。庄川の工事も同三十三年に始まり、常願寺川の砂防工事は明治三十九年から国営事業として始まった。明治期、県の歳出の約半分は、土木費、特に河川費であり、そのために教育や勧業費などに大きな影響を与えた。治水が富山県発展の鍵だった。

コラム

デ・レイケと高田雪太郎

デ・レイケは、「用水取り入れ口の一本化」、「霞堤の配置」、「白岩川の分離」などの常願寺川の改修工事を計画したオランダ人技師として知られている。

デ・レイケの指導のもと、計画立案や実際の施工をとりしきったのが高田雪太郎である。高田は安政六年（一八五九）に熊本藩玉名郡築地村（現、熊本県玉名市）に生まれた。明治十四年（一八八一）年に工部大学校（後の東京大学工学部）を卒業し、内務省に入省し、明治二十二年に富山県土木部長心得として着任し、七年間在籍した。明治二十四年七月の常願寺川大災害をきっかけとした改修工事では、工事を統括指揮し、約二カ年で事業を完成させた。また、黒部川の愛本橋架け替えや神通川の笹津橋の設計も手掛けた。富山県職員を辞した後は、民間に就職したが病を得て故郷熊本に戻った。その後、熊本県勤務を命ぜられるが病のため退職し、明治三十六年、自宅で四三歳の生涯を閉じた。

四、富山県の産業発展

置県後の富山県は、県内各河川の治水事業に大きな支出を払いながら、インフラ整備も進めた。また、今後の実業界を支える人材を育てるための実業学校も設立された。これらの分野の整備には、民間人の熱心な運動もあって進められていった。また、近代的薬業に生まれ変わった売薬業を担う資本家は、薬業のみならず金融業や発電事業などにも進出し、富山県の産業発展を牽引した。ここでは、明治時代の富山の産業発展に尽力した人物たちの動きから、産業発展の様子を紹介する。

薬業の近代化

富山を代表する産業といえば売薬と言われるほど、越中富山の売薬は江戸時代から全国に知られていた。明治時代には配置薬としてさらに全国に広まっていった。しかし、明治時代の富山の薬業は、厳しい試練の中で成長していったのである。明治政府は医薬・医療制度でも近代化をすすめた。政府は明治三年（一八七〇）、「売薬取締規則」を発令し、大学東校（後の東京大学医学部）での検査を行うなど、従来の売薬の取締りに乗り出した。このような政府の方針に対応して、より良質な医薬品製造のため売薬業者たちは資金と知恵を集めて、明治九年に現在の広貫堂の前身である調剤所広貫堂を設立した。同十年に出された「売薬規則」では、製薬を主とする売薬営業者、販売だけを行う請売業者、実際に薬を売り歩く行商人といった区分を初めて明確にした。

売薬営業者は、薬の品質に責任を負わねばならなくなったため、明治十年代に入ると、富山では売薬業者らが共同で次々と会社を設立した。こうして明治十四年までは順調に売り上げが伸びた。

しかし、明治十六年から施行された「売薬印紙税」は富山の薬業に大打撃を与えた。全国の売薬で大きな地位を占めていた富山の売薬が受けた打撃は

深刻で、同十五年の富山の売薬生産額六七二万円は、十七年には六五万円まで激減した。これに対して、富山県の売薬業者は事業全般の大幅な見直しと改革を行ない、海外市場への進出や、後継者育成のための薬学校を設立するなど努力を重ね、次第に売り上げを回復していった。

さて、越中富山の薬業近代化のさきがけとなったのは、前述の広貫堂である。広貫堂の社長には旧富山藩士で勘定方だった邨沢盛哉（むらさわせいさい）が就任したが、設立に大きく関わったのが密田林蔵や中田清兵衛といった売薬業者だった。

明治以降、薬業で蓄積した資本を近代産業に投資した代表的な薬業家が中田家・密田家・金岡家である。このうち密田家は能登出身で、江戸時代に富山に出て能登屋を名乗り商売を始めた。のちに売薬業に進出し、当主は代々、林蔵を名乗った。広貫堂設立に関わった林蔵は九代目である。九代林蔵は明治十一年に富山第百二十三国立銀行（現、北陸銀行の母体の一つ）の設立にも関わり、副頭取となる。この銀行の頭取は旧富山藩主一門の前田則邦だったが、五人の役員のうち、この九代林蔵と取締役の中田清兵衛の両名が実質的な資本提供者だった。このケースを先駆けとして、明治時代中ごろ以降、県内には売薬業者が設立に関わった銀行が登場した。

密田家には電力事業に乗り出した者もいる。明治二十七年の富山県物産陳列場において、北陸で初めて電気による灯りをともしたのは、密田家の分家の長男、密田孝吉だった。この電灯を見て電力事業に乗り出したのが、薬種商の初代金岡又左衛門で、売薬業者を中心に資金を集め、明治三十年に富山電灯株式会社（現、北陸電力の前身）を設立した。この他にも、売薬業者の資本は繊維、運輸、水産、保険、出版印刷などの事業への投資や薬業の専門学校の設立にも投下された。

広貫堂（『富山県写真帖』より）

港湾と鉄道の整備

産業の発展にインフラ整備は欠かせない。明治時代の越中富山でも数多の人びとがインフラ整備に尽力した。そのうち、高岡伏木の実業家、藤井能三の動きをとりあげる。

藤井能三は、弘化三年（一八四六）に越中国射水郡伏木村（現、高岡市）の廻船問屋能登屋の長男として生まれた。藤井の青春時代は、幕末から明治へ移り変わる激動期であり、変革期であった。明治二年（一八六九）に加賀藩から商法・為替両会社総頭取を命ぜられた関係で神戸に赴いた藤井は、神戸港に蒸気船が走り、おびただしい物資でにぎわう様子を見て衝撃を受けた。神戸港を見た藤井は、港湾整備の必要性を強く感じ、地元の人々へ港湾整備の重要性を訴え、次第に賛同者を増やしていった。次に藤井は、当時日本最大の汽船会社だった三菱汽船に対し、伏木港に汽船を寄港させるよう交渉する。三菱は厳しい条件を課すが、藤井の奔走ぶりと地元の支持を評価し、明治八年、三菱の汽船が伏木と東京・大阪・北海道などを結ぶことになった。二年後の明治十年には、三菱の寄港条件の一つであった西洋式灯台が完成した。この灯台の建設にも藤井は私財を投じた。同年北陸地方で最初の国立銀行である第十二国立銀行創立の発起人の一人ともなった。明治十四年になると、藤井は三菱に対抗するために地元の船問屋とともに「北陸通船会社」などを共同設立した。同時に、大型汽船が寄港できるよう政府に築港工事の申請を行なったが難航していた。

このころ藤井は、海内果への手紙で分県論を主張している。藤井は分県によって伏木港整備と高岡米穀取引所の設置を実現することで、伏木・高岡、そして自らの経済的利益を拡大することができると考えていた。また、分県の父と言われる米澤紋三郎とは義理の兄弟である。当時の越中を代表する経済人で、中央政府の要人と

藤井能三
（高岡市立伏木図書館蔵）

も交流のあった藤井は、分県運動と米澤を様々な面で支援していたと推測される。

明治十八年、藤井が創立に関わった共同運輸会社は三菱との激しい競争に敗れ、経済不況のなかで三菱に吸収合併された。しかし、藤井は伏木築港に向けての活動を続け、明治二十四年には「伏木築港論」を発表する。このなかで伏木港とウラジオストクと航路を結ぶため伏木港を近代港湾として整備することを主張した。伏木港は明治三十二年に開港場（外国と自由な貿易が可能な港）の指定を受けた。翌年には、藤井が発起人の一人として名を連ねる中越鉄道の高岡・伏木間が開通した。富山県の中心港と鉄道がつながり、産業発展の基礎がいよいよ固まったのである。

伏木築港論
（高岡市立伏木図書館蔵）

実業学校の創設と人材育成

産業発展には、人材の育成も欠かせない。明治時代後半には、全国的な産業の近代化に対応できる労働者育成のため、各地で実業学校や専門学校が設立された。土木費に大きな予算を割かざるを得なかった富山県でも、「勧業知事」と称される徳久恒範知事のもと、教育への支出を少しずつ増加させた結果、職業科高校の前身である実業学校が誕生している。明治二十七年（一八九四）に高岡に富山県工芸学校、福野に富山県簡易農学校、富山に薬業界からの多数の寄付を得て私立の共立富山薬学校が設立された。同二十九年には八尾町立蚕業学校、同三十年には富山と高岡に簡易商業学校、同三十九年には新湊町立新湊甲種商船学校、同四十二年には下新川郡立農業学校が設立された。

島　巌
（砺波正倉ＨＰより）

富山県最初の公立農学校である富山県簡易農学校（現、富山県立南砺福野高等学校）の創立は順調とはいえなかった。農業教育を行なう学校設立を進めたのは、地元砺波郡権正寺村（現、砺波市）の島巌（いわお）だった。島家は代々十村役を務める家柄で、明治になると、島は副戸長や石川県会議員を歴任した。水田単作地帯の砺波地方は、洪水などで稲が不作になると農家の収入は激減した。そこで島は、農家が米以外の作物を栽培できるように指導する人材が必要と考え、農学校設立のために活動した。しかしコレラにかかり、病床で家族に遺す財産を除き、農学校建設のため山林や建物を寄付すると遺言した。その遺言どおり土地が富山県に寄付され、島の遺志を継いだ同志たちも地元有志の創立費寄付の申込書をまとめたが、県会では受け入れられなかった。しかし、

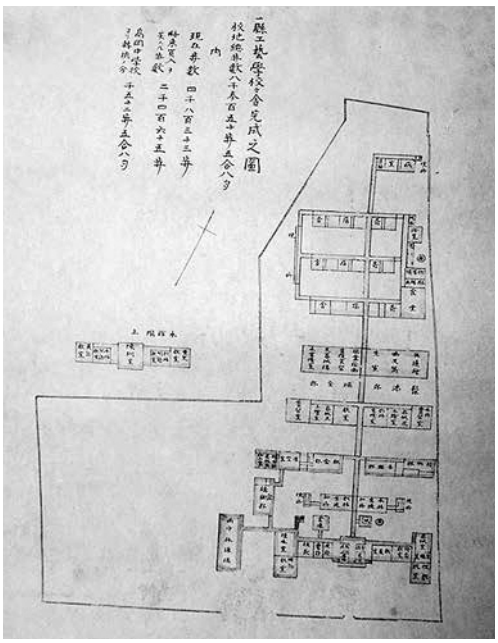
コラム ― 高峰譲吉とアルミ産業 ―

科学の進歩は工業生産性を向上させる。明治時代には日本人科学者の活躍も目立つようになる。明治を代表する科学者の一人が富山県出身の高峰譲吉である。

高峰は嘉永七年（一八五四）射水郡高岡町（現、高岡市）に代々続く町医者の長男として生まれた。父親の仕事の関係で金沢に移り、八歳で藩校明倫館に入り、その後長崎や大阪で医学や英語を学んだ。化学の道に進むことを決意した高峰は、明治十二年（一八七九）、工部大学校（後の東京大学工学部）応用化学科を首席で卒業した。その後三年間のイギリス留学の後、農商務省に入省し、アメリカに派遣され、化学肥料の研究に打ち込んだ。帰国後、日本初の化学肥料会社東京人造肥料会社（現、日産化学工業）を設立した。高峰はタカジアスターゼの発見とアドレナリンの抽出で知られているが、大正時代に地元富山県に対して水力発電による豊富な電力を生かし、高岡・伏木にアルミ工業を興すべきと提言した。その後、高岡では多くのアルミ会社が成長し関連産業が発達した。

明治二十七年に福野町が土地を寄付したことが徳久知事を動かし、富山県簡易農学校の設立が実現した。その後、明治三十一年に富山県農学校となった。

徳久知事は、工業振興の一環として工芸学校の設立も計画した。これを高岡に誘致するために尽力したのが、当時の高岡市長で県会議長でもあった堀二作だった。堀の精力的な活動もあり、明治二十七年十月、富山県工芸学校（現、富山県立高岡工芸高等学校）が誕生した。県立の実業学校としては県内初で、同種の工業学校としても全国で三番めの早さだった。初代校長には石川県工業学校の設立に関わった納富介次郎が就任した。その後、明治三十三年に、射水郡下関村大字中川（現、高岡市）に新校舎完成に伴い移転し、翌年校名を富山県立工芸学校と改称した。

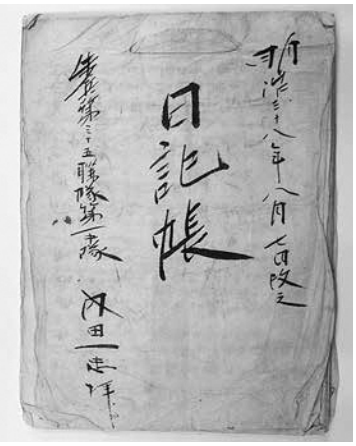


県工芸学校々舎完成之図
（富山県公文書館寄託　冨田家文書）

五、大正時代へ―さらなる産業発展に向けて―

日露戦争と富山県

明治三十七年（一九〇四）二月八日、東アジアでの権益をめぐるロシアとの対立から日露戦争が始まった。開戦直後の二月十一日に新湊の奈呉浦丸が青森県沖でロシア軍艦に撃沈され、県民は戦争を身近なものとして痛感させられた。五月には富山県を管轄下におく第九師団が動員され、乃木希典指揮下の第三軍に配属された。第九師団は旅順攻撃や奉天会戦に多くの犠牲者を出した。従軍した富山県民は二万三五七人、その内戦死者は二四〇一人であった。銃後の県民も国債に応募し、慰問袋や軍需用品を提供した。旅順陥落の報をうけると富山の町では提灯行列が行なわれ、日本海海戦の勝利を祝い、県民総出で屋外で一斉に仏具など音の出るものを鳴らす「総鳴り」が行なわれた。明治三十九年四月七日、富山県庁内で日露戦争における富山県出身の戦死者の慰霊祭、翌日には富山市で凱旋軍人祝賀会が行われた。しかし、多大な犠牲を払った県民の受けた衝撃は大きかった。県内各地に忠魂碑が建立され、亡くなった兵士たちの働きを今日に伝えている。



日露戦争出征日誌
（富山県公文書館寄託　内田家文書）

日露戦争後、ポーツマス条約によって県内漁業者の北洋漁業への進出が本格化した。日露戦争前から富山県は漁業振興に乗りだしており、明治三十三年には富山県水産講習所（後の海洋高等学校、現在は富山県立滑川高等学校）を滑川町に設置していた。明治四十年には、日露漁業協約が締結され、北洋漁業への期待が高まるとともに、カニ、サケ・マスなどの漁獲量も増加した。水産講習所の練習船「高志丸」による漁業調査は大きな成果をあげた。当時の富山県水産組合連合会はその会報第三号において、県内漁業者の遠洋漁業参加を強く呼びかけている。

治水から発電へ

富山県は置県以来、水との戦いを繰り返してきた。明治時代もほぼ毎年のように水害に悩まされ、明治二十年代の県予算に占める土木費の割合は七割

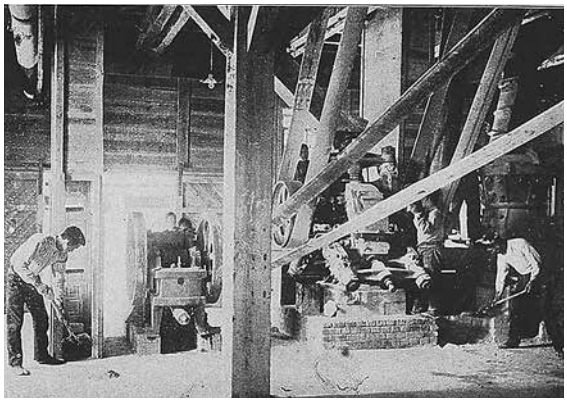
近くに及ぶこともあった。しかし、明治二十五年（一八九二）京都市が我が国最初の水力発電所を稼動させ電力を供給し始めると、富山県でも豊富な水を利用しての電源開発の動きが見られるようになった。

富山県における電源開発は、明治三十年に密田孝吉、金岡又左衛門らによる富山電灯株式会社（明治四十年、富山電気株式会社と改称）が設立されてからである。密田は、大久保用水を利用した水力発電所を大久保村塩（現、富山市）に建設し、明治三十二年に富山市に送電を開始した。また、日露戦争後の工業の振興によって電力需要が次第に増加したため、明治四十一年に奥田村において火力発電所を建設した。さらに、明治四十四年、細入村庵谷に水力発電所を建設した。この後、日本海電気株式会社となり、現在の北陸電力株式会社へと発展した。

大正期に入ると、第一次世界大戦による大戦景気で県内の諸産業は発展し、また、価格が上昇した石炭よりも安価な電力の需要が増加した。電源開発の目的は、産業用の動力源とすることである。県内の繊維関係で電気を原動力とした機械台数は、明治四十二年から大正元年（一九一二）にかけて四倍近くに増えている。電力を利用するため、海陸の交通の便に恵まれた伏木には大工場が次々と建設された。明治末から大正初めに知事を務めた濱田恒之助は、自著『経世小策』の中で、水力発電事業が富山県の産業発達の大きな原動力となると述べている。以後、富山県は水力発電の開発を進め、大正九年には、常願寺川水系で県営発電事業に着手し、昭和九年（一九三四）に総発電量が全国一位となった。豊かな水が電気を生み出し、地域経済を支え、富山県の工業を進展させたのである。

工業県への動き

富山県において、工業を支えるインフラの整備が進んだのは日清戦争後である。特に橋梁の整備が進み、県内の大小河川に徐々に架設されていった。まず、橋の通行料を徴収する賃取橋が架橋され、その後県による架橋へと変わっていった。鉄道では明治三十年（一八九七）に、大矢四郎兵衛、島田孝之、藤井能三らが設立に関わった本県最初の鉄道である中越鉄道が砺波平野を走った。翌三十一年には北陸線の金沢・高岡間、三十二年には富山まで開通した。富山駅・直江津駅間は富直線として建設されていたが、直江津まで開通し、信越線に合流したのは大正四年（一九一五）である。このとき米原・直江津間を結ぶ鉄道は、北陸本線と改称され、東京・大阪との直結が実現した。



北陸人造肥料株式会社
（『富山県写真帖』より）

これにより県内の交流が進むとともに、港湾整備ではまず伏木港があげられる。明治三十二年には開港場に指定され、三十三年には中越鉄道が伏木・城端間を結び、明治末には、庄川を分流させてからは本県の中心的貿易港として発展した。一方東岩瀬港は、大正時代からしだいに近代的港に修築され、神通川口と切りはなして富山の外港として発展した。

明治時代の富山県では、明治三十年代末から四十年代に至って機業工場や北陸人造肥料株式会社などの化学工場が台頭してくる。大正時代に入ると、北陸本線の全線開通や水力発電の開発によって、工場の設置が急速に進んだ。そして、本格的に化学・機械・鉄鋼などが成長する昭和時代を迎えるのである。明治期の富山における近代工業の芽生えや様々なインフラ整備が、大正時代以降に工業県へと発展する基礎となったといえる。

おわりに

明治時代に入ると西洋文明を取り入れた日本社会は激しく変化していった。そのような中、越中の人びとは自分たちの手で暮らしをより良いものにするために様々な努力を重ねてきた。越中における自由民権運動の目的の一つは富山県の分県であった。石川県からの分県を主張した有志たちは、治水対策と産業・経済振興をねらい、運動を繰り広げた。そして中央政府の方針と越中人の分県運動が時機を得た結果、明治十六年（一八八三）五月九日に現在の富山県が誕生した。

富山県設置後は、治水事業や道路・港湾・鉄道などのインフラ整備により産業基盤を整える一方、人材育成や都市の近代化にも多くの予算を投じていた。特に治水事業と産業振興政策は、明治末ごろから実を結び始めた。洪水被害は減少し、豊富な水資源を生かして大正から戦前にかけて、水力発電事業を発展させ、豊富で安価な電力を基盤に工場誘致を進め工業県へと姿を変えた。

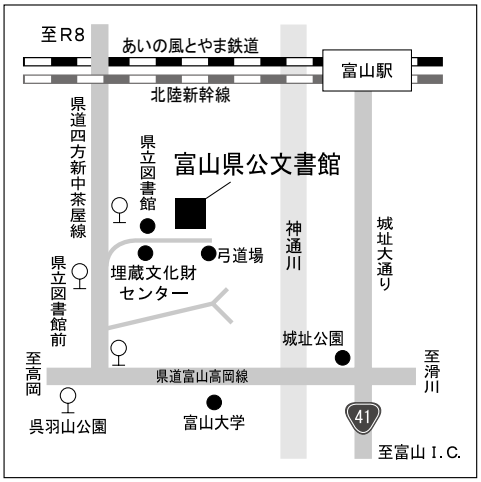
今回の企画展では、明治時代の越中富山を振り返ったが、明治の激動期に富山県の礎を築いた先人たちの先見の明と努力の跡に、改めて敬意と感謝の念を禁じえない。今後も私たちは先人たちの精神を受け継ぎ、自然と歴史・文化、産業の調和のとれた郷土富山を末永く受け継いでいくことが大切である。

主要参考文献

	書　　名	編　著　者	出版年	発行・出版
1	『富山県史』通史編Ⅴ近代上	富山県	1981	富山県
2	『富山県史』近代統計図表	富山県	1983	富山県
3	『富山県政史』第四巻	富山県	1947	富山県
4	『富山県のあゆみ』	富山県	1973	富山県
5	『置県百年』	富山県	1982	富山県
6	『富山県薬業史』通史編	富山県	1987	富山県
7	『富山県薬業史』資料集成下巻	富山県	1987	富山県
8	『ふるさととやまの人物ものがたり』	富山県教育委員会	2011	富山県教育委員会
9	『高校生のためのふるさと富山』高等学校郷土史・日本史学習補助教材	郷土史・日本史教材作成委員会	2018	富山県教育委員会
10	『宮崎県史』通史編近・現代１	宮崎県	2000	宮崎県
11	『越中の群像　富山県百年の軌跡』	富山新聞社	1986	桂書房
12	『森田日記と明治維新－北越戦争と越中の草莽－』	高井進	1994	富山県郷土史会
13	『とやま近代化ものがたり』	高井進監修・富山近代史研究会編著	1996	北日本新聞社
14	『現代語訳・明治二年越中国新川郡大動乱　ばんどり騒動の裁判記録』	浦田正吉	2016	楓書房
15	「明治期の砺波地方と高岡との関係」（『鷹栖・大島・椚山地区調査報告書　富山平野地区土地改良事業長期総合効果調査』）	淡路憲治	1965	北陸農政局計画部計画課
16	「中越鉄道敷設と地主層との関連」（『富大経済論集』12巻2号）	淡路憲治	1966	富山大学経済学部経済学会・北陸経済研究所
17	「明治十五年の石川県々治改革についての山田内務卿の上申書」（『富山史壇』第131号）	浦田正吉	2000	越中史壇会
18	「山田顕義と藤井能三-富山県分県の「功労者」-」（『富山史壇』第152号）	浦田正吉	2007	越中史壇会
19	「初代県令国重正文について-防災・防疫の視座から-」（『富山史壇』第169・170合併号）	貴堂巌	2013	越中史壇会
20	藤井能三展目録	高岡市立博物館	1990	高岡市立博物館
21	「公益に人生を賭した伏木港開港の祖　藤井能三」（『マリンボイス21』Vol.264）	日本埋立浚渫協会	2005	日本埋立浚渫協会
22	「富山売薬が育てた富山のものづくり－近代産業の基盤から先端産業まで－」（『商工とやま』No.590～592）	須山盛彰	2008	富山商工会議所
23	平成６年度特別企画展「越中の自由民権運動」	富山県公文書館	1994	富山県公文書館
24	平成16年度特別企画展「幕末の越中　激動の時代を生きる」	富山県公文書館	2004	富山県公文書館
25	平成22年度特別企画展「富山の治水の歴史－近世から近代へ－」	富山県公文書館	2010	富山県公文書館
26	平成25年度特別企画展「ふるさと富山　百三十年のあゆみ」	富山県公文書館	2013	富山県公文書館

企画展史資料一覧

	史　資　料　名	所　蔵	実物	パンフ	パネル	ポスター	ちらし
軸　掛	嘉永六丑年北アメリカ舟渡来之図	富山県公文書館	○				
越中の明治維新	大目付より今般御上洛につき浪人縮り方など触書	富山県公文書館寄託（佐伯家文書）	○	○			
	小隊司令士として出兵内用意申渡状	富山県公文書館寄託（森田家文書）	○				
	高田城下の情勢などにつき書状	富山県公文書館寄託（森田家文書）	○				
	奮戦につき酒肴差贈状	富山県公文書館寄託（森田家文書）	○				
	富山藩本陣福島北側戦闘図	富山県公文書館寄託（森田家文書）	○	○			
	森田三郎戦死につき案内状	富山県公文書館寄託（森田家文書）	○				
	暴動頭塚越村忠次郎等金沢於公事場取糺口書綴	富山県立図書館	○	○			
	明治五年改暦御布告留	富山県立図書館	○				
	郵便規則抄録	富山県公文書館（海内家文書）	○				
	学制	富山県公文書館（海内家文書）	○				
	西南役出征覚	富山県公文書館（浅野家文書）	○				
	森田三郎隊の進軍経路（『森田日記と明治維新』）				○		
	戊辰役富山藩士出陣之図	富山県立図書館			○		
	宮崎忠次郎記念碑（『置県百年』）				○		
	砺波農民騒動痕（『置県百年』）				○		
	安田善次郎肖像（『近代日本人の肖像』）	国立国会図書館デジタルコレクション		○			
	対青閣（『中越商工便覧』）	国立国会図書館デジタルコレクション		○	○		
越中の自由民権運動	旧新川県引渡演述書写	富山県公文書館（海内家文書）	○				
	相益社談第１号	富山県公文書館（海内家文書）	○				○
	東京日日新聞（明治14年７月１日付）	富山県公文書館（海内家文書）	○	○			
	海内果肖像	富山市立老田小学校		○	○	○	○
	海内果の生家（『置県百年』）				○		
	開智社跡（「歴史と文化が薫るまちづくり事業計画書」）	富山県			○		
	大阪事件公訴状	富山県公文書館寄託(稲垣示関係文書)	○	○			
	立憲政友会各府県支部創立委員の候補者申出につき依頼	富山県公文書館寄託(稲垣示関係文書)	○				
	稲垣示肖像（『富山県政史』四）			○	○		
	自由新誌（『置県百年』）				○		
	北陸七州有志大懇親会会場（『置県百年』）				○		
	自治党団結ノ主意書	個人蔵	○				
	島田孝之履歴	個人蔵	○				
	憲法発布大典出席に際し上京日録	個人蔵	○				
	北辰雑誌	富山県立図書館		○	○		
	島田孝之肖像	富山県公文書館		○	○		
富山県誕生とその背景	分県之建白書	富山県公文書館	複製				
	石埼謙の分県建白書提出につき進達書	国立公文書館	複製				
	富山県設置の達	富山県公文書館	○			○	○
	市町村制実施について建議	富山県公文書館	○				
	中学校設置についての伺及び許可	国立公文書館	複製				
	明治十六年八月富山県臨時会議事録	富山県議会図書室	複製	○			
	治水費国庫の補助を上請する建議	富山県公文書館	○				
	神通川治水の儀に付請願	富山県公文書館	○				○
	神通川、小矢部川、庄川等風水害の状況に付具申	富山県公文書館	○				
	石埼謙肖像	砺波市教育委員会（砺波正倉ＨＰ）		○	○		
	米沢紋三郎肖像	富山県公文書館		○	○	○	○
	大隈重信肖像（『近代日本人の肖像』）	国立国会図書館デジタルコレクション		○	○		
	山田顕義肖像（『近代日本人の肖像』）	国立国会図書館デジタルコレクション		○	○		
	高岡米穀取引所（『富山県写真帖』）				○		
	国重正文肖像	富山県公文書館		○	○	○	○
	富山県中学校（『置県百年』）				○		
	庄川流域諸山土砂扞止のため作業取締についての布達（甲第七一号）	国立公文書館			○		
	現在の常西合口用水写真（企画展「デ･レイケと常願寺川」）				○		
	用水の合口化（企画展「デ・レイケと常願寺川」）				○		
	霞堤（企画展「デ・レイケと常願寺川」）				○		
	常西合口用水取入口写真（『置県百年』）				○		
	捷水路の開削（『立山町史』下巻）				○		
	デ・レイケの改修計画（(『立山町史』下巻）				○		
	デ・レイケ設計の常願寺川河川改修図	富山県公文書館（高田文書）			○		
富山県の産業発展	集会所を売薬会社及び広貫堂と改称につき届書	富山県立図書館	○				
	富山名所「広貫堂」	富山県公文書館（河尻家文書）	○				
	広貫堂写真（『富山県写真帖』）			○	○		
	伏木築港論	高岡市立伏木図書館	○	○			
	中越鉄道株式会社開通式祝辞	高岡市立伏木図書館	○				
	伏木港写真（『富山県写真帖』）				○		
	藤井能三肖像	高岡市立伏木図書館		○	○	○	○
	県工芸学校々舎完成之図	富山県公文書館寄託（冨田家文書）	○	○			
	徳久恒範肖像	富山県公文書館			○		
	島巌肖像	砺波市教育委員会（砺波正倉ＨＰ）		○	○		
	巌浄閣（『置県百年』）				○		
大正時代へ	日露戦争出征日誌	富山県公文書館寄託（内田家文書）	○	○			
	明治三十七・八年戦役の救護事業尽力につき慰労金給与状	富山県公文書館（浅野家文書）	○				
	練習船高志丸写真（『富山県写真帖』）				○		
	富山電気株式会社、発電用水路開鑿に要する土地収用法に依る事業認定の件請議	国立公文書館	複製				
	濱田恒之助『経世小策』	富山県立図書館	○				
	濱田恒之助肖像	富山県公文書館			○		
	大久保発電所写真（『富山県写真帖』）				○		
	株式会社十二銀行（『富山県写真帖』）				○		
	北陸人造肥料株式会社（『富山県写真帖』）			○	○		
	明治時代の県知事肖像	富山県公文書館			○		



■ 交通機関

JR富山駅発バス
- 新港東口行〈県立図書館前〉下車徒歩……3分
- 高岡小杉方面行〈呉羽山公園〉下車徒歩……10分

お問い合わせ先 **富山県公文書館** 〒930-0115 富山市茶屋町33-2
TEL 076(434) 4050 FAX 076(434)4093 http://www.pref.toyama.jp/branches/1147/